

## 浄土で祖師にお会いして

### 靈山勝海（よしやま しょうかい）

文化8年（1811）の春に<sup>いとな</sup>営まれた親鸞聖人五百五十回大遠忌に<sup>だいおんき</sup>参詣した<sup>らいさんよう</sup>頼山陽は、その時の感懐を五言の詩によせている。

鎌倉は麋鹿に付し、  
室府は灰燼に委す。  
一姓の優婆塞、  
還って五百の春を伝う

親鸞聖人七百回大遠忌記念に出版された『本願寺』という冊子の意識によれば、

鎌倉の幕府の跡は空しくて  
雄鹿雌鹿は群れ遊ぶ  
覇者足利も影かくし  
京洛は装い幾度か  
愚禿と名告り九十年  
巷の塵にまみれても  
面影慕う人波は

五百の春に溢れたり  
と、そのころを伝えている。

仏教の世界観によれば、<sup>しよぎよう わじよう</sup>諸行は無常であり、<sup>えいこせいすい</sup>栄枯盛衰は世の習いで私どものよく知るところであるが、そういう世界にあって、いのちをかけてたよることのできるもの、「畢竟依」である如来の本願を明らかにして下さった親鸞聖人の目は、時代を超え世界をも超越したものであったことを歴史が証明したというのである。

五百五十回忌が勤まったのは、文化8年（1811）春のことであった。それは<sup>さんごうわくらん</sup>三業惑乱による百日間の閉門が幕府から解けた文化3年（1806）の秋から、わずかに五年に満たない歲月しか経っていない。「信心異なる」ことによって<sup>へいもん</sup>真実報土へ往生できず、異なる世界へ<sup>るてん</sup>流転することがあってはと、僧俗ともに真剣に法を求めた姿であったと思う。

法は法そのものの働きで広まるともいうが、法は人によって広まる事実も見。むしろ後者の意を私どもとしては重要視すべきであろう。聖人は「獅子の身中の虫」（『註釈版聖典』791頁）と申された。その「獅子の身中の虫」こそ私であったとうなずく身になることが、七百五十回大遠忌をお迎えする重要な姿勢といえよう。

★ ★ ★

御消息に「有阿弥陀仏」というお弟子に宛てられた一通がある（『註釈版聖典』785頁）。末尾に

この身は、いまは、としきはまりて<sup>そうら</sup>候へば、さだめてさきだちて<sup>おうじよう そうら</sup>往生し候はんずれば、<sup>じようど</sup>浄土にてかならずかならずまぢまみらせ<sup>そうら</sup>候ふべし。

と記されている。聖人の消息の書き方からして有阿弥陀仏というお弟子は<sup>しやうしん ねんぶつぎやうじや</sup>正信の念仏行者ではなかつ

たらしい。その有阿弥陀仏に対して懇切丁寧な指導をなされた消息である。その終段で先のことばが記されている。

あなたは人を待った経験をおもちであろうか。恋人であれ、客であれ、待つということほどいららすることはない。現在は「ケータイ」があるから待つという経験はかなり少なくなったと思う。先のことばを聞き、待つことの不安を経験したことのあるものは、聖人を空しく待たしてはなるまい。浄土で「もう来るであろうか」「どちらから来るであろうか」と不安げに身を乗り出して遠くを待ち望む聖人の姿が目に見えぬ。「きょうもだれも来てくれなかった」としよんぼり肩を落とす聖人の後ろ姿を見るのはつらい。

須臾にすなはち西の岸に到りて、永くもろもろの難を離る。善友あひ見えて慶楽すること已むことなし。（『註釈版聖典七祖篇』468頁）

「待っている」というのは現世否定を意味しない。「苦悩の旧里は捨てがたく」、「安養の浄土はこひし」がたき身が、今生で変わるわけではない。死に臨んでも「死にたくない」実態があるであろう。

聖人が「待っている」と仰せられるのは、いまずぐに信をえよという意味で、信の人となることを望んでいられるのである。この後記にある一文を見て受信者である有阿弥陀仏は感涙にむせんだにちがいない。いままでの心得違いをあらためて、正信の弟子となって聖人の負託に応えたにちがいない。

この有阿弥陀仏宛の消息は日付が、七月十三日となっていて、聖人が何歳の時のものか類推する手がかりがない。しかし「いのち候はば、かならずかならずのぼらせたまふべし」（『註釈版聖典』750頁）と書かれた消息や「目もみえず候ふ。なにごとみみなわすれて候ふ」（『註釈版聖典』757頁）など身体の衰えを表現されたものとの関連で、八十五歳から八十七歳のころのものかと推定されている。いずれも現在の八月、暑い夏のころである。

聖人の七百五十回忌の大遠忌法要まであと二年あまりとなった。七百回大遠忌の勝縁に三十歳なんなんとする年に会うことができた。生涯二度の御遠忌に会いえることができそうである。健康に留意してぜひとも祖聖の御遠忌大法要に参拝したい。御影像の前で、「私こそ身中の虫でありました」と慚愧の涙を流し、やがてお浄土で「長らくお待たせしました。あなたさまの導きのおかげで、業火に焼かれる身でありながら、やっとなんとかあなたさまお待ちのお浄土へ来させていただきました」と申したい。そのときの聖人のよろこびの顔を思うこのごろである。

（勸学）